

「職業婦人」以後、「BG」以前

——高度経済成長始動期の女性事務員表象についての一考察——

坂 堅太

一、「職業婦人」／「BG」／「OL」

現在一般には女性のオフィス労働者を指す語として使われている「OL（オフィス・レディ）」という言葉が、雑誌『女性自身』の企画から生まれた造語であることはよく知られている。当時「BG（ビジネス・ガール）」と呼ばれていた彼女たちの新たな呼称について、同誌一九六三年一月四日号にて「緊急世論調査」が告知されると、同月二五日号には投票総数二六、四八一票の結果、「オフィス・レディ」⁽¹⁾（略称OL）が第一位となったことが発表された。

企画の背景にあったのは、約二ヶ月前の九月一二日に開催されたNHK・第五三八回放送用語委員会での「BGは流行語であり、また悪い意味にとられるおそれもあるので、放送では使わない」という決定である。その理由について、委員会は次のように発表している。

1 BGは流行語であり、一部で、「バー・ガール」、「ビー・ガール」などの略語として、悪い意味にとられるおそれがあることは否定できない。

2 一般にはこのような悪い意味でBGということばを使う人はごく少ないと思われるが、以上を考慮し、NHKとしては、BGということばを使わないこととする。⁽²⁾

だが、「悪い意味にとられるおそれがあること」を理由にしつつ、「一般にはこのような悪い意味でBGということばを使う人はごく少ないと思われる」とも述べるこの説明に、十分な妥当性を認めることは難しい。さらに、この決定に至る経緯にも疑問は残る。実は「BG」をめぐるのは、前年四月二六日開催の第五〇八回放送用語委員会でも審議がなされていた。ただ

しこのときは、「一部で悪い意味に用いる面があることは否定できない」ものの、「マスコミなどで悪い意味に用いる例は今のところ皆無なので、「BG」を禁句にする必要はないとする意見が多かった」として、禁止は見送られている。議論の内容は殆ど変っていないにもかかわらず、なぜ委員会の判断は一八〇度の転換をみせたのか。そうした事情の十分な説明もなままた一方的に発表されたこの決定に対しては、戸惑いの声も多かったようである。『女性自身』に掲載された投票結果を見ても第八位には「BG廃止反対」という意見が入っており、また同じ誌面には「BGは、すっかり日本語化した便利なことば。それをわざわざ英語に直訳して、ヘンな意味をこじつけるほうがおかしい」（上坂冬子）、「NHKの『BG追放』にはどうも上からの押しつけがましい態度が見られる」（梶山季之）というコメントが紹介されているなど、当時の人々にとってもNHKの決定は納得のいくものでなかった様子がうかがえる。

ただ、こうした「上からの」決定をせざるを得ないほどに、「BG」という語がメディア上に氾濫していたことも事実である。「ビジネス・ガール」という言葉それ自体は昭和戦前期から登場しており、例えば一九二七年には「実にビジネスガールが一人残らず読まねばならぬものであるを自信致します」とうたう雑誌『Journal of Business Girl』が創刊されている。⁵⁾とはいえ、当時女性のオフィス労働者を指す語として一般的であったのはやはり「職業婦人」であり、この言葉が「BG」という略

語として本格的に日本社会に定着したのは、高度経済成長が始まった一九五〇年代半ば以降とみられている。そして一九六〇年代初頭には、「毎月、毎週発行される婦人雑誌や週刊紙のたぐいをも、BG」という文字の見えないことはありません」という状況が出現する。⁶⁾一九六二年には読売新聞紙上で「新BG読本」という特集記事が連載され（四月三日～六月九日、全四六回）、さらに翌六三年には大関早苗編『BG入門』（荒地出版社）、上坂冬子『私のBG論』（三三書房、藤崎武男『B・G手帖』（鶴書房）など「BG」をタイトルに掲げる書籍が相次いで刊行されていたことを踏まえると、もはやこの語は単なる「流行語」という範疇に収まるものではなくなっていたといえよう。

一方でこうして量産される「BG」論については、「そのとり上げ方は一面的で、興味本位のもが多く、本当に正しく科学的な立場から、BGを見究めようとしているものは皆無」という批判もなされていた。⁷⁾そうした批判の一例として、ここでは当時『朝日ジャーナル』に掲載された長洲一二一「番ヶ瀬康子『BG』論の功罪」を参照したい。⁸⁾乱造される「BG」論のなかで「現代BG像が、勝手につくりあげられている点に、どうも問題がありそうである」とする長洲・一番ヶ瀬は、「職場における労働者としてのBG」と、「労働の場からかけはなれた」「巨大で強烈な新しい消費者集団としてのBG」というかたちで、「現代BG像」が分裂していることを指摘する。そこには「いままでの根強い家族主義的な生活感覚をふっさるひ

とつの刺激になるかもしれない」という積極的な意義も認められるが、「消費面からだけのB G論」がメディアを賑わす結果、「B Gが婦人労働者である」ということの認識」が希薄になるのでは、と警鐘を鳴らしていた。

それでは、このような分裂と偏りを孕んだB G像はどのようにして形成されていったのか。その一端を明らかにするため、本稿では「オフィス・ガール」や「サラリー・ウーマン」、「サラリー・ガール」など、未だ多様な呼称が混在していた一九五〇年代前半の女性事務員表象に焦点を当てる。この時期に発表された源氏鶏太の小説群に共通する問題を分析することで、その後の「B G」言説がどのように準備されていったかを考えたい。源氏はサラリーマン小説の書き手として活躍する傍ら、『婦人生活』（一九五二・一〜二）に連載された「向日葵娘」以降、「緑に匂う花」『講談倶楽部』一九五二・七〜一九五三・六）、『丸ビル乙女』『平凡』一九五三・八〜一九五四・一）、『見事な娘』『婦人倶楽部』一九五四・九〜一九五五・二）と、女性事務員を主人公とする作品（これらはのちに「B G小説」と呼ばれることになる）を相次いで発表している。このうち最初に発表された「向日葵娘」では、部分的ではあるものの女性事務員たちが職場で直面する矛盾が描かれていたが、それ以降の作品では彼女たちの「労働」に焦点が当てられることは殆どなくなっていく。こうした変化が意味するものは、長洲・一番ヶ瀬が危惧した「職場における労働者としてのB G」像の後退とも重なるはずである。

このとき重要となるのが、職場での恋愛を経て「サラリーマンの妻」になるという、源氏の小説が描き出していた「女性の新しいライフコース」をめぐる問題である¹⁰。周囲に決められた相手との見合いではなく、恋愛を通じ自らの意志で配偶者を選びとること。源氏の作品が提示する〈幸福な結婚〉は、〈女性解放〉という戦後民主主義の文脈を強く意識させるものだった。一方でそうした物語は、女性労働力の新陳代謝を目論む企業の労務管理と結びつくことで、職場内での彼女たちの地位を周縁化する機能も果たしていた。本稿では「恋愛・結婚」と「職場」の問題とが接続される言説状況のなかで、女性事務員という存在がどのように描かれ、語られていたのかを分析していく。

二、「サラリーガール」の「戦後」性

源氏のサラリーマン小説、特に『三等重役』（一九五二）以後のサンフランシスコ講和条約発効後に発表された作品については、これまでその〈戦後的〉な〈明るさ〉が指摘されてきた。例えば、「はじめじめした主従関係や家族主義を否定」し、「平社員でも社長になれる民主主義の風通しのよさを描いた」とする斎藤駿は、そこに「戦後民主主義の明るさ」を見出している¹¹。また、源氏作品の大衆的な人気を要因を「占領期を通過した戦後的価値観を巧みに感受していた」点に求める鈴木貴宇は、「戦前のサラリーマンとは異なる「明るさ」を特徴とするそれら

の作品群を「明朗サラリーマン小説」とまとめている。¹³⁾

そしてサラリーマンたちと働く場を共にする女性事務員を主人公とする「BG小説」にも、やはり「戦後民主主義」的な雰囲気や「明朗」さといった要素を見出すことができる。例えば丸ビルに勤める「サラリーガール」三人の恋模様を描いた「丸ビル乙女」は、次のように始まっている。

恋の丸ビル、あの窓あたり、泣いて文書く人もある……とは、昭和初年に一世を風靡した流行歌の一節だが、その丸ビルの五階、東京物産に、滝井万里子は、昨年から勤めていた。

万里子は、恋の丸ビルの味を、まだ、知らぬ娘であった。いや、この活気に満ちた近代ビルの中にいると、今頃、泣いて文書くなんて、そんなしおらしい女がいようとは、信じられなかった。勿論、万里子は、はじめした恋愛なんて、真ッ平であった。恋愛をするからには、身も心も躍るような、颯爽としたのでなければ、嫌なのである。でなかったら、恋愛なんて、おことわりだ、と決心していた。

冒頭にひかれているのは、一九二九年に発表された流行歌「東京行進曲」（作詞は西條八十）の一節である。ここでは昭和戦前期の「職業婦人」と戦後の「サラリーガール」という、同じ丸ビルで働く女性事務員のイメージが重ねられているが、「この

活気に満ちた近代ビルの中にあると、今頃、泣いて文書く人なんて、そんなしおらしい女がいようとは、信じられなかった」というように、読者にはすぐさま両者の断絶が提示される。「しおらしい」、「はじめした」過去の表象との切断により、主人公・万里子が戦後という新時代（それは「身も心も躍るような、颯爽とした」ものであることが期待される）を生きるにふさわしい人物であることが強調されているといえよう。本節と次節では源氏の描く女性事務員像に反映された「戦後の価値観」の諸相をみていくが、そのためにもまず、「男女同権」や「女性解放」というスローガンとともに女性の社会進出の動きが広がっていくなかで、女性事務員にどのような眼差しが注がれていたかを確認しておきたい。

男性の出征により生じた労働力不足を補うかたちで戦時期に増加した女性労働者の数は、敗戦後の工場整理や復員による失業者対策で一時的に激減する。¹⁴⁾しかし、経済的な混乱が落ちつき始める一九五〇年ごろからは女性労働者の数は一貫して増加の傾向にあり、一九五〇年時点で三一七万人であった女性雇用者の数は、六〇年には七三八万人と倍以上の伸びを見せている。¹⁵⁾

そしてこの量的な増加は、女性労働者に対する認識にも変化をもたらすことになった。女性雇用者の増加を「何よりも戦後において行われた男女平等を基本としての大きな社会変革が影響を与えている」とみたと谷野せつは、次のように書いている。

新しい憲法は婦人をあらゆる封建性から解放して男子と同等の地位におくことになりましたが、その後制定せられた諸法制は、すべてこれを裏付けるものとなり、この婦人解放を実現する条件の一つとして、婦人の経済的自覚が著しく高められて来ました。その結果、ながい間職業婦人や労働婦人に対してむけられて来た批難や反対の声にもかかわらず、最近では学校を卒業すれば、ともかくも外に出て働らくということが女の常識となり、家でぶらぶら遊んでいることの方が、心はずかしいほどに変えられて来ました。婦人の職業に対するこうした社会観の変化は当然婦人の職業への志向を促し、職業活動の意欲を強める結果をなしているものと考えられます。⁽¹⁵⁾

このように、当時の人々にとって女性労働者の増加は産業上の問題であるだけでなく、「婦人解放を実現する条件」である「婦人の経済的自覚」の高まりをも意味していた。そして「学校を卒業すれば、ともかくも外に出て働らく」ということが女の常識とされるほどに雇用者化がすすむなかでも、特に顕著な伸びを見せていたのが事務部門である。明治から昭和初期まで女性労働者の典型像は製糸業や紡績業に従事する「女工」だったが、⁽¹⁶⁾戦後の事務職員の増加はそうしたイメージに変化をもたらしている。女子の職場進出のテンポは男子を圧倒しているが、な

かでも女子事務員の伸び率は最高のピッチである」というように、⁽¹⁷⁾一九五〇年からの一〇年間で女性事務員の数は八〇万人から一六〇万人と倍増しており、「戦後高度成長期までの事務職は、職業としての拡大とともに、量的には女性化の趨勢のもとにあった」と評されるものだった。⁽¹⁸⁾

こうした状況を鑑みれば、女性事務員は、女性の職場進出という戦後的な風潮を象徴する存在だったと見ることができる。「終戦後、とみにふえたオフィス・ガールは何を考えているだろうか」という関心が高まるなか、⁽¹⁹⁾雑誌や新聞では彼女たちに関する記事も増加し、婦人雑誌には女性事務員に向けた指南記事の特集も組まれるようになっていく。「女性が社会の一員としてほんとうに才腕をふるうチャンスをもったのは、けっきょく、敗戦ののち。そして「サラリーガール」とよばれる女性たちのカテゴリーがうちたてられた」というように、⁽²⁰⁾「サラリーガール」の台頭は「敗戦ののち」に訪れた女性の社会進出を典型する情景として捉えられていたのである。

さらに彼女たちの職場が「近代ビル」のオフィスであったことも、その新鮮な印象を強くしたと考えられる。例えば『三等重役』が「人口十万ぐらいの城下町」、『坊っちゃん社員』(一九五三)が「東京から十数時間、西下する」「人口は一万五千ぐらい」の「N町」、『鬼の居ぬ間』(一九五五)が広島県三原市といったように、源氏のサラリーマン小説には地方都市を舞台としている作品もあるのに対し、「BG小説」には東京、

あるいは大阪という大都市で働く女性たちしか登場しない。丸ノ内に通勤し、仕事終わりには銀座や新橋で飲食を楽しむという彼女たちの姿は、同世代の読者にとって最先端の風俗への憧れを呼び起こすものでもあっただろう。

このように一九五〇年代前半の女性事務員表象は「戦後」という文脈を強く意識させるものであったわけだが、彼女たちを主人公に据えた「B G小説」の中心的なテーマとなっていたのが「恋愛」である。²²⁾先に見た「丸ビル乙女」でも、現代を生きる主人公と過去の「しおらしい女」との対照は「じめじめした」／「颯爽とした」という恋愛の性質においてこそ示されていた。次節では作中で描かれる恋愛の様相を分析し、それらがどのような女性像を提起していたかを考察していく。

三、恋愛と民主主義

「職場を舞台としながらも、およそ働いている様子は描かれていない」とも評されるように、²³⁾源氏の「B G小説」において女性事務員たちの労働に焦点があてられることは殆どない。代わって物語の中心となるのは、職場を舞台に展開される彼女たちの恋愛模様だった（もちろんサラリーマン小説にも恋愛の要素はあるが、「B G小説」には仕事面の問題が描かれない分、その比重が高い）。基本的なプロットは、入社一年〜三年ほどの女性事務員が主人公となり、職場で出会った男性との交際が描かれ、紆余

曲折を経たのち、無事に意中の相手からプロポーズを受ける、というものだ。そしてこの「恋愛」こそが、源氏の「B G小説」における「戦後」的な「明朗」さを支えている。

戦前までは殆どの企業において職場恋愛は「法度か、或は危険（出世？ができぬ）を伴ったもの」として忌避されてきた。²⁴⁾そのため「昔は、堅く御法度だった社内恋愛が、今は堂々とはれてゐる」という戦後の光景は、²⁵⁾労働者にとって「最も身近で、かつ通俗的なレベルで感受された「民主主義」と言えるものであった。²⁶⁾当時のメディアでもこのテーマは広く取り上げられており、「職場の中の愛情」は「新しい愛情のあり方」として「新しい人間形成」に繋がっていくとする鶴見和子や、「多くの婦人たちの場合、わが国の生活状況においては、家庭とその血縁・地縁的な周辺の世界しかもちえないのが現実」である以上、職場での交際は「より広い世界への出口を与えるものといえる」と主張した武田清子のように、²⁸⁾そこに女性解放への糸口を見る論者も多かった。

では、源氏の「B G小説」に描かれた恋愛はどのようなものであったのか。ここでは主人公たちの造型を分析することから始めたい。「我が社の恋人」（向日葵娘）、「丸ビルのサラリーガールの最も代表的な女性」（丸ビル乙女）、「ミス・丸ノ内」（見事な娘）というように、「B G小説」の主人公たちは誰からも愛される女性として設定されているのだが、注目したいのは先に見た「丸ビル乙女」の冒頭が戦前期の「しおらしい女」との

対比から始まっていたように、彼女たちの魅力が過去の理想的女性像との対照により示されている点である。

例えば、源氏が自らの理想とする女性事務員を描いたという「見事な娘」の主人公・高原桐子は、幼少期から「まことに女には惜しい程のガキ大将ぶり」を見せ、周囲からは「男の子であつたら」と嘆息されるほど活発な人物とされている。ある日、会社で行われた消防演習のなかで、ビルの七階から降下する訓練の志願者が募られたが、「気の弱い男なら、途中で失神することがある」という内容に「たいていの男たちは逃げ腰」となってしまう。そんななか、「窓から顔を出して見ているうちに、自分も滑り落ちてみたくなった」桐子が見事訓練をやりとげると、「ビルの窓窓から、万雷の拍手」が寄せられ、彼女は「いちだんと、その名を社内に喧伝」させることになる。重要なのは、「ミス・丸ノ内といわれるほどの娘の勇敢さであつてみれば、過去には見られなかった、現代に生きている娘の新鮮な魅力に接したような気がする」というように、こうした彼女の「勇敢さ」は「過去」から「現代」へとという転換を象徴するものとして、その「新鮮」さが強調されていることだ。さらにこのエピソードの直後、娘をたしなめようとする母親との間で、次のような会話が交わされる。

「まあ、この娘は！」と、母親を、それこそ、失神させるほど、おどろかしてしまった。／「だって、とても、いい

気持だったわ。あたし、もういっぺん、やってみたくらいよ。」／「め、めっそんな。第一、そんなあられもない真似をしたら、お嫁の貰い手がなくなりませう。」／「まさか。」／「いいえ、そうにきまつていますとも。男という者は、口では何んといつていても、さて、結婚するととなると、つましくて、純日本風の娘を選びたがるんですよ。」／「だって、あたしだって、これで、随分とつましくて、純日本風の娘のつもりよ。」／「でも、そんなことをしたら、世間は、そう見てくれませぬよ。」／「じゃあ、世間で、案外、封建的なね。」／「そうですよ。だから、いいのです。」／「あたしにはわからないわ、その理屈。」

昔ながらの「つましくて、純日本風の娘」を是とする「世間」の論理を「だから、いいのです」と肯定する母に対し、それらを「封建的」の一語で退け、「あたしにはわからないわ、その理屈」と跳ね除ける桐子の芯の強さが好意的に描かれている。このように源氏の描く女性主人公たちは、「しおらし」さや「つままし」さといった過去の美德からは逸脱した「あられもない」人物であるからこそ、ヒロインたる資格を与えられるのである。

また、「向日葵娘」や「丸ビル乙女」、「縁に匂う花」では物語の途中で上司や親族から縁談が持ち込まれ、恋愛結婚が見合結婚か、という選択を主人公たちが迫られる点にも注目したい。縁談の相手は会社重役の子息など、いずれも生活の安定を保証

する（魅力的な）ものであるが、主人公たちは周囲の説得に屈することなく恋愛結婚を選択する。一九五〇年代の日本では未だ見合い結婚が結婚形態の主流であったものの、恋愛結婚の比率が一貫して増加する傾向にあったなかで、この選択の構図は何を意味していたのか。「丸ビル乙女」の主人公である万里子は、「自分の娘は、なるべくなら、おとなしく見合結婚をしてくれた方が、安心です」という母の言葉には応じず、縁談を持ってきた先輩社員・太田稲子に自ら断りを申し入れるのだが、その場面は次のように描かれている。

「そう、よく分ったわ。じゃア、あたしから、うまく部長さんに云っておいてあげます。」／「お願いします。」と、万里子は、頭を下げた。／「でもね、滝井さん、あたし、あなたが羨やましくなつたわよ。」／「どうしてですの？」／「きつと、時代が変わつたのね。あたしの娘の頃は、なかなか、そうはつきり、モノが云えなかつたものよ。」／「あら。」／「それでいいのよ。自分の結婚は、自分の意志できめることが、いちばん大切なことかもしれないわ。あたしなんか——。」／稲子は、そこまで云つて、ふつと、口をつぐんだ。稲子の過去に、自分の結婚を、自分の意志できめられなかったことがあったのだろうか。

ここでは「自分の結婚は、自分の意志できめること」が可能

な万里子と「自分の結婚を、自分の意志できめられなかった」稲子、という対比によって、主人公の行動が「はつきり、モノが云えなかつた」時代からの転換を象徴するものと位置付けられている。当時「従来の日本の結婚の特色のもつとも大きなものは、結婚する本人の自由意思で結婚が決定されるのでないという点（不自由結婚）である」と論じていた川島武宜は、「伝統的結婚制度」である「仲人結婚」・「見合い結婚」と、「近代的結婚制度」である「自由結婚」という対比で両者の関係を整理していた。恋愛結婚とは先ず何よりも「本人の自由意思」で配偶者を選ぶことであり、その選択自体に、いわば「戦後民主主義」的な意味合いが込められていたのである。

以上のように、源氏の「BG小説」は主人公の造型や職場恋愛というテーマなど、様々な形で過去とは断絶された（新しさ）が強調されており、その意味でこれらの作品もまた「戦後民主主義の明るさ」に満ちたものであることは間違いない。そして「節子さんにいつも教えられ、私が節子さんだつたならと思うことが度々」という「向日葵」の読者評に見られるように、⁽³²⁾主人公たちの振る舞いは同世代の読者にとって一つの模範・理想としても受容されていた。その大衆的人気を鑑みても、源氏の作品群が「戦後民主主義」のイメージをわかりやすい形で伝播していたことの意義は看過すべきではないだろう。しかし、女性事務員たちの恋愛がすべて「結婚」という一点に収斂していたことは、その「明朗」さに微妙な翳りをもたらしてもし

た。次節以降では、こうした「恋愛」と「結婚」が「職場」においてなされることの問題について考えたい。

四、「サラリーマンの世界」と〈女性事務員の世界〉

源氏のサラリーマン小説と「BG小説」とを比べた際に気付かされるのは、主人公の家族に関する描写の分量に圧倒的な差があることである。サラリーマン小説、特に未婚の若手サラリーマンを主人公とする作品の場合、彼等は基本的に一人暮らしをしており、郷里の家族とは手紙を交わす程度のコミュニケーションしか描かれない。そのため、物語は殆ど会社内の人間関係の範囲でのみ展開されていく。一方、これとは対照的に女性事務員たちは殆どが両親と同居しており、家族内の会話を描く場面も多い。そればかりか「緑に匂う花」や「見事な娘」では、父の定年や失職による家計不安が主人公たちの結婚を阻む最大の障害として設定されており、その解決をめぐる展開が物語の重要な起伏をなしている。

家族描写に関するこの対照的な違いは何を意味しているのか。ここで参照したいのは、「サラリーマン小説」に対する源氏の認識である。このジャンルの開拓者を自負する源氏は、自身の作品のオリジナリティを「仕事上での悩みとか、上役とのトラブルとかをテーマにした」ことに求め、それが「サラリーマンを単に主人公にしているだけ」の小説との違いである、と説明

している。³³つまり、オフィスという職場に固有の経験に焦点を当て、それを「サラリーマンの世界を描いた小説」として提示したことに源氏は自らの先駆性を見ていた。³⁴彼のサラリーマン小説が社内の人間関係ばかりを取り上げたのは、それこそが「サラリーマンの世界」だという確信があったからだった。そして裏を返せば、「サラリーマンの世界」を描くにはそれだけで十分だったということになる。

このように考えると、源氏の「BG小説」が職場における〈社員〉としての姿だけでなく、家庭における〈娘〉の姿をも描いていることの意味も見えてくる。職場での人間関係だけでなく家族との関係も描かなければ、〈女性事務員の世界を描いた小説〉としての「BG小説」は成立しない。源氏はそのように考えていたのではないか。言い換えれば源氏にとって、〈女性事務員の世界〉は職場だけで完結するものではなかった、ということである。

「サラリーマンの世界」と〈女性事務員の世界〉との違いは、それぞれの小説内における「恋愛」の顛末にも見ることができ。サラリーマン小説の場合、男性主人公たちの結婚はあくまで〈社員〉の出来事として描かれている。例えば『三等重役』で物語序盤から描かれる「若原君」と「青子さん」の恋愛は、二人を自宅に呼び出した上司の「浦島さん」が、「こら、若原君そこへ両手をつけて、どうか、青子さん、お願いですから、僕のお嫁さんになって下さい、と言え」とプロポーズを〈命令〉

する形で婚約が成立する。また『明日は日曜日』(一九五三)では、主人公である「大伍君」が「桃子さん」にプロポーズをしたのち、彼女の両親に挨拶へ向かうのだが、その場面自体は描かれていない。代わりに小説の末尾に置かれているのは、途中の駅で偶然出会った「課長の佐々木さん」に対し「課長。こんど、僕たちは、結婚することになりました」と、「大伍君」が一人の部下として〈報告〉する姿である。

これに対し、「BG小説」の結婚は〈家族〉の問題としてあらわれている。物語の結末はプロポーズを受けた主人公が恋人とともに自身の父母に報告する(あるいは、報告に向かう)場面に設定されており、そこに会社の人間が登場することはない。読者が最後に見届けるのは、〈社員〉ではなく〈娘〉として両親の前に立つ彼女たちの姿だ。すなわち、結婚という私的な出来事までもが〈会社〉に包摂されるサラリーマンとはちがいない、女性事務員たちの結婚はあくまで〈会社〉の外にある〈家族〉の場に回収されているのである。そしてこのことは、サラリーマンと女性事務員とは〈会社〉との距離において決定的な差異が存在していることを意味している。

では、〈女性事務員の世界〉が職場だけでは完結しえないものとされる要因は何だったのか。このとき、同時期の女性事務員向けの指南記事に「お家へ帰ったら、そこには御両親や御兄妹や、貴女が娘としての別の生活が待っている」、「娘としての生活と会社の生活をはつきり区別を立てた方がいい」といった

記述が見られることは重要である。³⁵「娘としての生活」と「会社の生活」とが「別の生活」とされなければならない理由は、「お勤めに出ても、一生涯仕事をつづけるということとは、ある特殊な人は別として、一般には無理」であるからだ。すなわち、最終的には結婚して退職することが予定されている女性事務員たちにとって、「会社の生活」はあくまで一時的なものに過ぎない。彼女たちが最終的に帰属するのは〈家庭〉である以上、「娘としての生活」を常に意識することが求められる。彼女たちはサラリーマンのように、「会社の生活」だけに集中することは許されないのである。だからこそ、源氏の「BG小説」に描かれる〈女性事務員の世界〉は、職場と家族という二つの領域にまたがるものとならざるを得なかった。次節ではこの二重生活の要請が、女性たちの職場環境をめぐる問題とも連関していることを確認していく。

五、職場は誰のものか／誰のものでないのか

すでに見たように、一九五〇年代はオフィスワークに従事する女性雇用者が急激な増加を見せていた。そうしたなかで雑誌メディアに浮上してきたのが、性差別的な職場環境に悩む女性たちの声である。「誰にでもできるようなことを何年も何年も同じようにくり返し、男性の同僚たちが、一步一步責任ある地位に昇っているのに、女だからといって頭打ちになっている」

といったように、⁽³⁶⁾補助的な業務への固定化や昇進遅滞などの差別的な待遇に対する不満は五〇年代を通じて繰り返し表明されていた。

その一方で、「始めから高級な仕事をしたがって、雑用などをいひつけられると、ふくれつ面になるのも、ガールの通弊だ」⁽³⁷⁾、「ただ遊ぶこと、喰べること、おしゃれをすることのみに⁽³⁸⁾楽しみを求めて、仕事は惰性でやっているだけ」というように、⁽³⁹⁾女性事務員たちの勤務態度を問題視する議論も多かった。そしてその根本にある要因とされたのが、「女の人のなかには、最後には結婚するという逃げ場をいつも用意しているという感じもある」とする結婚の問題である。「女の方でも家庭に入るものという考えを持っておりますから、仕事に生涯打ちこむという意識がよくなる」、⁽⁴⁰⁾「若い女の人は、結婚前までの一時的な職業というような考えかたをしているものがいまでもやはり多い」というように、⁽⁴¹⁾当時は結婚願望こそが彼女たちの労働意欲の減退を招いているとする見方が強く、例えば入社二年目の若手会社員たちが集った座談会では、ある男性社員が次のように述べている。

男は責任ある仕事についているのに女にはそれが無いということ。それが不満だという女の人もいるでしょうが、うちの会社の大多数の女性は配偶者を見つけたために入社しているのです、そんなむつかしい仕事はいやだという。

(…)女の人はまたパツと結婚してさっさと会社を止しちゃう。そうすると仕事に穴があいてしまつて会社でも困るのです。だから女の人には重要な仕事をやらさないということになるのです。女性の方の気構えも必要じゃないかと思うのですが……⁽⁴²⁾

ここでは女性が結婚退職を望む以上、職場での待遇差別はやむを得ないという正当化が図られており、またその解決方法も、彼女たちの「気構え」という内面的な問題に求められている。だがそもそも女性の短期勤務は労働力の新陳代謝を求める企業の論理に基づくものであつて、結婚退職や若年退職が慣例化していったのは、大企業を中心に経営の「合理化」が進められる一九五〇年代以降のことだった。⁽⁴³⁾こうした企業の労務管理の手法について、熊沢誠は次のように説明している。

①単純労働と②低賃金（昇給遅滞）とは、女性の勤続志向をしかるべくよわめる。彼女らは、男たちのように上へではなく、横への脱出をはかるといふべきであろう。だが、その結果としての③短勤続は、次にははねかえつて①と②に論拠を与える。この①単純労働―②低賃金―③短勤続の相互補強関係を獲得し「脱出」のルートを性別に敷設することこそ、それ以降もかたちを変えて貫かれる女性労働者にたいする労務管理の基本原則といふことができる。⁽⁴⁴⁾

しかし当時はこうした構造的な問題に議論が及ぶことがなかったために、女性たちは個人の次元でこの矛盾に立ち向かうことが要請された。一九五〇年代半ばに発表された石垣綾子「主婦という第二職業論」は、まさにそうした個人レベルでの〈解決〉を提言するものであったといえる。「職場は結婚するまでの腰かけ場であるから働く女性の多くは、自分の仕事に真剣ではない。これはと思う結婚のチャンスがあれば、あっさりとして職業をなげだして、家庭に入り、主婦になってしまう」として、女性たちの職業意識の低さを批判する石垣は、女性の社会的解放を進めるためには結婚後も仕事を続ける必要があるとし、次のように書く。

男性と対等な地位と待遇を要求するならば、男と同じように、職場に生きぬく覚悟がなければならぬ。男には家庭に逃げこむ「特権」はない。男はどうしても働かなければ、一人前の人間として社会に通用しない。男は生涯を通して職場にしばらくつけられているが、女は主婦になるという第二の職業が、いつでも頭のなかにあるから、第一の職業である職場から逃げこしになっている。(…)職場で女が突きあたる困難は数かぎりなくあるけれども、ただ泣き言をならべているだけでは、途は開かれて来ない。⁴⁵⁾

こうして女性たちに向けて「男と同じように、職場に生きぬく覚悟」を求めた石垣に対し、専業主婦の立場を擁護する坂西志保から「誰でも一樣に外に出て働かなければならぬという意識は、今後捨てていただきたい」という反論が提出されたこと⁴⁶⁾で、第一次主婦論争へと発展していく。この論争について村上潔は、家事労働Ⅱ主婦労働というかたちで性別役割分業が自明視されていただけでなく、「あたかもすべてが女性の態度／選好によって決定されたポジショニング(外で働く／家庭に入る)であるかのように」見なされることで、経済的な理由から「働かねばならない」女性の存在が不可視化されたという問題点を指摘している。その上で本稿が取り上げたいのは、女性労働を「態度／選好」の問題に還元する議論と男／女の二項対立が連結される過程で、「男はどうしても働かなければ、一人前の人間として社会に通用しない」以上、男性の労働は「態度／選好」以前のものであるというように、「職場」と男性との結びつきが不可分のものに見なされていることだ。すなわち家事労働Ⅱ主婦労働という前提だけでなく職業労働Ⅱ男性性という前提も受け入れている石垣の議論は、女性の職場進出を求める一方で、結果的には「職場は男性の領域である」という認識を強化するものでもあったといえる。では何故、「男は生涯を通して職場にしばらくつけられ」ねばならないのか。ここに見えるのは、戦後日本の労務管理において重要な役割を果たした「男性世帯主」という労働者モデルである。

職工差別の撤廃など敗戦後に進んだ企業内民主化を支えていたのは、企業の構成員は基本的に平等であるとする「従業員」の理念である。しかし実際には、女性労働者たちはそうした平等処遇の恩恵に与ることができなかった。⁴⁸ この矛盾の背景には、「従業員」が基本的には家族を養う労働者、すなわち「男性世帯主」を範型として成立していたという問題が存在している。「戦後の職場におけるジェンダーは、家族を養うという「従業員」の理念に基づき、これら「職場の正規の構成員」と「そうでない者」との間に根本的に異なった期待と経験を配分するような意味づけの構造」であると指摘した金野美奈子は、⁴⁹ 世帯主という労働者像と男性Ⅱ職場／女性Ⅱ家庭という性別役割分業の関係を次のように説明する。

「女性の本来の居場所は家庭である」という言説自体は戦前の社会にも見られたものである。しかし、正規の構成員Ⅱ「男性世帯主」という前提が、戦後、職場で共有されていくことによつてはじめて、その生活が経済的には「正規の構成員」によつて支えられることが予定された「女性の本来の居場所」を「家庭」とし、女性を職場の「正規の構成員」とみなさないことに重要な意味が与えられることになる。⁵⁰

先に見た石垣の議論がこうした「男性世帯主」の前提に立つ

ていることは明らかであるし、論敵となった坂西もまた「男の人は職業を自分の一生の仕事としている」として、職場を男性の領域とする認識自体は共有している。重要なのは、男性と職場との結びつきを「生涯」、「一生」続くものとするレトリックがもたらす問題である。

机を並べている人たちから「貴女はまだお嫁に行かないの？」と、云われる度に身のちぢむ思いがするし、も一つは五年も同じ職場にいと長すぎるのでというのである。生活を背後にもつてはいない補助的な仕事ではあつても、仕事が一生の目的であり、同時に生活の手段である男性に比べて余りにも安易な考え方である。大体そういう女の態度だから、職場でもつい大切な仕事は托されないとこのことになつてしまうのである。⁵¹

女性が懸命に学力や技能を身につけても、活用してくれない場合の例は数へきれない。(…)このあきらめには大義名分に拘泥する女らしさもあるだらう。男はどんな役どころになつても生活を背負ふ以上は迂闊に罷めないだらうから。さうした苦しいところで、これからの女性はどう一ふんばりしなければならぬのだらう。⁵²

女性たちの「態度」に働きかけ、「もう一ふんばり」を求め

るこれらの叱咤が、男女平等の実現に向けたものであったことは疑い得ない。しかし、「仕事が一生の目的であり、同時に生活の手段である男性」、「男はどんな役どころになっても生活を背負ふ以上は迂闊に罷めない」という言葉は、「生活を背負ふ」女性労働者の存在を不可視にただけでなく、女性と「職場」との距離を遠ざけ、彼女たちを「家庭」に回収する動きにもつながっていた。

前節で確認した源氏のサラリーマン小説と「B G小説」との描き分けは、こうした「職場」観を期せずして捉えていたといえる。私的な領域をも「会社の生活」に捧げること、それが「正規の構成員」たるサラリーマンに求められる「職場に生きぬく覚悟」であったからこそ、源氏の描く「サラリーマンの世界」は会社内だけで完結していたのである。一方、女性事務員は「正規の構成員」であることを認められなかった以上、彼女たちは「会社の生活」／「娘としての生活」という二重化された（女性事務員の世界）を生きることになった。もちろん、生活の全てを企業に明け渡すような「職場に生きぬく覚悟」が問題含みであることは言うまでもない。しかし一九五〇年代当時においては、女性たちがそうした「覚悟」から徹底して遠ざけられることで、差別的な待遇が自明視されていたことは指摘しておかねばなるまい。

最初の「B G小説」である「向日葵娘」では、作品の序盤、「お

茶汲みストライキ」という奇妙な事件が描かれている。お茶汲みは「女の仕事」であるとする男性社員の横暴な態度に憤慨した女性事務員たちが立ち上がるなか、「何か、割り切れぬもの」を感じた主人公・節子は、父親との話し合いを経て一人参加しないことを決意する。このとき節子の父は、「やっばり、女事務員がお茶をいれるべきだ、とわかっているひどが、節子の外にも、きつと何人かあるはずだ。しかし、大勢に押されて、それをいうことが出来ない」とスト参加者たちを切り捨てたうえで、彼女に対し「ここで、節子は、敢然とお茶をいれる勇気が、果して、あるだろうか」ということだ」と問いかける。そして「あたし……何んだか、恐ろしいけど、思いきつて、やつてみよかしら」という節子の答えのあと、二人は次のような会話を交わす。

「みんなから、白い眼で見られるかもしれないよ。」／「ええ。」／「口もきいて貰えないかもしれないよ。」／「ええ。」／「よし、やつてごらん。」と、お父さんが力強い口調でいった。／「正しいと思うことは、やつてみることだ。それが男にも、女にも、必要なのだ。これからの時代に、特に必要なのだ、節子。お父さんがじいっと見ていてあげるから、やつてごらん。」

このエピソードを通じて示されているのは、たとえどのよう

な苦難が待ち受けようとも「正しいと思うこと」をやり通す「勇氣」を持つ主人公と、「大勢に押されて」それが出来ない周囲の女性たち、という対比である。だが、ただでさえ弱い立場に置かれているなかで「ストライキ」に踏み切るといふ女性事務員たちの決断もまた、一つの「勇氣」であるはずだ（実際作中では参加者たちは失職の危機さえ迎えている）。しかし、その線引きの恣意性が問われることはない。こうして〈スト権〉を行使する「職場における労働者」としての女性事務員像は退けられ、「お茶をいれる」主人公だけに「勇氣」が見いだされることで、「これからの時代」にふさわしい「戦後的」なヒロインの物語が始まっていく。

職場での出会いは新たな愛情のあり方を可能にするものであり、「愛情の面でも新しい人が、人間として新しいと思う」とその意義を強調していた鶴見和子は、女性こそがそのイニシアティブをとることができるのだとしたうえで、その理由をこう語っていた。

男の人と女の人との間の成長のズレ。女のほうは愛情の問題と社会的な自分の活動とを統一しようという一つの意識がある。ところが男は、課長とか何とかに上ってゆきたい気持がある。女はそういうものになれないから、ここで統一しようという気持ね、女が本質的に純粹だというのでなく、かえって差別待遇が逆作用して、女を進歩の方向に

向かわせる⁵⁴

周囲に決められた見合いではなく自らの意志で相手を選ぶという恋愛結婚は、戦後の人々にとつて〈民主主義〉を実感させるものであったはずだ。しかし、女性たちにもたらされた恋愛の主導権は、構造化された待遇差別により男性のような地位上昇を望めなかったことによるものだった。職場での自由恋愛というそれ自体は〈民主主義〉的であるはずの事象が、男女の平等処遇という別の〈民主主義〉を犠牲にしなければならなかったというアイロニカルな関係の上に、源氏の「B G 小説」は成立していたのである。そしてこのことがもはやアイロニーとさえ認識されなくなったとき、「消費面からだけのB G 論」が氾濫することになるだろう。

【注】

- (1) 「女性自身・世論調査 第四回」『女性自身』一九六三・一一・二五。後年、この結果は編集部により手が加えられたものであることを、当時の編集長であった櫻井秀勲が証言している（『昭和史再訪 新語「OL」登場』『朝日新聞』夕刊、二〇一一・一〇・一）。櫻井によれば、実際の一位は「オフィス・ガール」であったが、「職場の男性上司が『ウチの女の子』と呼ぶのに重なる『ガール』が気に入らなかった」ため、七位であった「OL」を強引に一位にしたという。

- (2) 「放送用語メモ (10)」(『文研月報』一九六三・一一)。
 (3) 前掲「放送用語メモ (10)」。
 (4) 前掲「女性自身・世論調査 第四回」。
 (5) 山本保信「創刊の辞」(『Journal of Business Girl』一九二七・七)。
 なおこの雑誌は同年九月発行の第三号より『婦人とビジネス』に
 名称を変更している。
 (6) 上坂冬子・志賀寛子・加藤尚文『BG学ノート』(三一書房、
 一九六一)。
 (7) 前掲上坂冬子・志賀寛子・加藤尚文『BG学ノート』。
 (8) 長洲二二・一番ケ瀬康子『BG』論の功罪」(『朝日ジャーナル』
 一九六三・四・一四)。
 (9) 「向日葵」の労働をめぐる問題については、拙稿「女性事務員
 たちの〈成長〉の行方―源氏鶏太「向日葵」論―」(『就実表現
 文化』一六号、二〇二二・一)で論じた。
 (10) 鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造―源氏鶏太『三等重
 役』論」(『Intelligence』一一号、二〇二二・三)。
 (11) 斎藤駿「源氏鶏太と〈私〉」(『思想の科学』一五二号、一九七五・三)。
 (12) 前掲鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造」。
 (13) 鹿野政直『現代日本女性史 フェミニズムを軸として』(有斐閣、
 二〇〇四)。
 (14) 日本統計協会編『日本長期統計総覧 第一巻』(総務庁統計局監
 修、日本統計協会、一九八七)。
 (15) 谷野せつ「最近における婦人職業の進出について」(『職業研究』
 一九五二・一一)。
 (16) 広田寿子『現代女子労働の研究』(労働教育センター、一九七九)。
 (17) 前掲長洲・一番ケ瀬『BG』論の功罪」。
 (18) 金野美奈子『OLの創造 意味世界としてのジェンダー』(勤草
 書房、二〇〇〇)。
 (19) 座談会「今日のオフィス・ガールの言い分」(『丸』一九五二・七)。
 (20) 例えば「向日葵」の連載誌である『婦人生活』では、少なく
 とも一九五一年から毎年三、四月号に新卒者向けの特集が生まれ
 ていることが確認できる。
 (21) 向井啓雄「サラリーガール五つの抵抗」(『知性』一九五七・九)。
 (22) 源氏作品に描かれる恋愛については、そのロマンス小説的な要
 素を分析し、「確かな経済的観念を持ち得た新世代の女性を包容
 する(理想)の男性を描いたことで、源氏鶏太の恋愛小説群は「空
 想恋愛小説」として、ひとときのリアリティを持ち得た」とする
 金岡直子の議論も重要である(源氏鶏太『青空娘』論―ロマン
 ス小説のリアリティ―『論潮』一一号、二〇一八・七)。
 (23) 井原あや『女性自身』と源氏鶏太「ガール」はいかにして働
 くか―」(『国語国文』九四巻五号、二〇一七・五)。
 (24) 大和勇三「サラリーマン考現学」(『日曜日』一九五二・二)。
 (25) 高見順「サラリーマンの実態」(『世界』一九五二・二)。
 (26) 前掲鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造」。
 (27) 座談会「職場に生れた新しい愛情」(『婦人公論』一九五五・二)。
 (28) 武田清子「職場結婚を祝福する」(『婦人公論』一九五六・五)。

- (29) 同作が収められた『源氏鶏太全集』第一〇巻（講談社、一九六五）の「あとがき」には、「娘としても、B Gとしても、桐子のよう
な女が理想的という思いが抜け切っていない」と書かれている。
- (30) 今泉洋子・金子隆一「配偶者選択の現状」（『人口問題研究』一七三号、一九八五・二）。
- (31) 川島武宜『結婚』（岩波新書、一九五四）。
- (32) 「読者の頁 ひまわり娘ファン」（『婦人生活』一九五二・一一）。
- (33) 源氏鶏太『わが文壇的自叙伝』（集英社、一九七五）。
- (34) 源氏鶏太『夏雲冬雲 私の履歴書』（日本経済新聞社、一九七六）。
- (35) 特集「職場の親切手帖」（『婦人生活』一九五二・五）。
- (36) 石津澄子「独身倦怠期」（『婦人公論』一九五五・一〇）。
- (37) 無署名「サラリーガール手帖 就職」（『小説新潮』一九五二・一一）。
- (38) 水田幸雄「着飾りおしゃべりの日々」（『婦人公論』一九五六・五）。
- (39) 座談会「新しい女性への期待」（『婦人公論』一九五四・三）。
- (40) 座談会「働く婦人の憂鬱」（『婦人公論』一九五二・一一）。
- (41) 座談会「男女同権とはこういうことだ」（『婦人公論』一九五六・一〇）。
- (42) 座談会「私達は職場の二年生」（『知性』一九五五・四）。
- (43) 伊藤康子「戦後改革と婦人解放」（女性史総合研究会編『日本女性史5 現代』東京大学出版会、一九八二）。
- (44) 熊沢誠『新編 日本の労働者像』（ちくま学芸文庫、一九九三）。
- (45) 石垣綾子「主婦という第二職業論」（『婦人公論』一九五五・二）。
- (46) 坂西志保「主婦第二職業論」の盲点（『婦人公論』一九五五・四）。

(47) 村上潔『主婦と労働のもつれ その争点と運動』（洛北出版、二〇一一）。

(48) この点について野村正實は、「学歴主義であり、かつ性別によって明確に仕切られた経営秩序」である「会社身分制」が戦後も引き継がれたという問題を指摘している（『日本の雇用慣行 全
体像構築の試み』ミネルヴァ書房、二〇〇七）。

(49) 前掲金野美奈子『OLの創造』。

(50) 前掲金野美奈子『OLの創造』。

(51) 松田ふみ子「婦人週間に思う」（『労働時報』一九五三・四）。

(52) 芝木好子「オフィス・ガール哀史」（『婦人公論』一九五五・二）。

(53) 男性労働者たちが「家族生活への経済的貢献以外のコミットメントをミニマムにとどめる」よう要請された結果、「ある意味では実際の家族から切り離されていくことになった」とする金野美奈子の指摘も重要である（「生活の論理」と「処遇の論理」―男性ホワイトカラーにおける近代家族モデルの歴史社会学―『東京女子大学社会学年報』一号、二〇一三・三）。

(54) 前掲座談会「職場に生れた新しい愛情」。

（付記）源氏鶏太の小説本文の引用は『源氏鶏太全集』（講談社、一九六五・一九六七）に拠る。引用文中の「／」は改行を意味する。